

南山大学七十五周年記念事業、「ライネルス中央図書館構想」について

山田 望

二〇二二年五月、南山大学七十五周年記念事業の一環として、長年の懸案であった図書館のリニューアル事業を立ち上げることとなり、図書館長兼、大学七十五周年史の編集委員でもある私が旗振り役となって、この事業企画のためのワーキング・グループを立ち上げると共に、「ライネルス中央図書館構想」の構想文をまとめ上げることとなった。学園創立者のヨゼフ・ライネルス師の名前を冠した中央図書館と命名することが先に決まっていたため、ライネルス師の生涯と功績について調査することから始め、加えて、本学にふさわしい図書館のあるべき姿とはどのようなものであるのか、との課題を設定し、最終的に、次のような理念の下に図書館構想を提示することとした。「であう」「つながる」「かわる」―地の塩、世の光として真のイノベーションを求めて―。以下は、この理念の下に作成された「ライネルス中央図書館構想」の構想文である。

1. 学園創立者ヨゼフ・ライネルス師の功績

一九三二年に南山学園の母体となった旧制南山中学を設立した神言会のヨゼフ・ライネルス師は、学校設立のモデルとして、当時の新教育改革の流れを汲む一九一七年創立の成城学園の自由教育と一九二九年創立の玉川学園の全人教育とを指摘し、偏狭な愛国心や儒教精神ではなく、キリスト教主義に根ざした自由闊達な全人的一貫教育を目指した。その方針は、一九三〇年に世界を襲った経済恐慌により、日本でも財政危機下において比較的支持を得やすかった実利優先の商業学校の設立ではなく、あくまでも文系・理系・社会科学系全般を網羅した普通科旧制中学の設立に拘ったことや、四年後の一九三六年に少人数学級編成による南山小学校の設立を実現させたことにも、ライネルス師のキリスト教主義に基づくリベラル・アーツ中心の全人教育への拘りが終始一貫していたものと看取できる。

他方、学園創立より二五年遡る一九〇七年、ライネルス師三三歳の時に母国ドイツのボン大学に提出し哲学博士号を取得した学位論文（邦語訳は、九州大学の稲垣良典教授の翻訳により『中世初期の普遍問題』として一九八三年、創文社から出版）は、それまでの思弁や類推のみに依拠した名だたる碩学たちの通説を、原典からの緻密な実証分析によって悉く論破・退けようとした画期的な研究論文であり、その著者名と論文名とは、ジルソン『中世哲学史』、コプルストン『哲学史』、アメリカ・カトリック大学編『新カトリック百科事典』にも記載され、旧態依然とした欧州中世哲学界に变革の一石を投じたと称されるほどの功績であった。本書を紐解くならば、全く新しい初期スコラ哲学の見取り図を新たな方法論の確立をも含めて学界に提起しようとした、きわめて斬新かつ大胆な变革をいささかも厭わないとの、ライネルス師の並々ならぬ気概や気迫まで読み取ることができる。ドイツ人としては

言葉少なく温厚な性格で人当たりが良かったと評されるライネルス師は、実は、その内面に立ち入ると、実証的な裏付けが揃っていれば、従来の通説を全面的に覆すこともよしとする、真理・真実を求めて転換・変革を厭わないとの進取の気性の持ち主であった。

さらに、ライネルス師が、学園創立期の校友会誌『南山』の表紙や卒業記念アルバムなどに署名を求められる度に綺麗な筆跡で記していた、“*Seid edel, treu und gut*”（高潔忠実にして善良なるべし）とのドイツ語文は、文豪ゲーテによる“*Das Göttliche*”（神的なるもの）という詩の最初の六行からヒントを得たもので、そこには、“*Edel sei der Mensch, hilfreich und gut; Denn das allein Unterscheidet ihn. Von allen Wesen. Die wir kennen.*”（人間よ、高貴なれ、人に尽くし、まことあれ！かくありてこそ人は、我らの識るいっさいの生きものより別たるるなれ」とあった。ライネルス師が機会あるごとに記した、“*Seid edel, treu und gut*”（高潔忠実にして善良なるべし）との標語は、後にポルト神父の提案により、“*Hominis Dignitati*”（人間の尊厳のために）という建学のモットーとして生き続けることとなったのである。（青山玄『ライネルス師とその人柄』平成六年、二一九―三〇頁）

2. 南山大学に求められる図書館像

以上のようなライネルス師の功績を念頭において、本学に求められる図書館像を思い描きつつ、日本の大学図書館のモットーに目を向けてみると、ある傾向に気づかされる。「知の交流拠点・開かれた大学図書館」（国立H大学）、「知と創造の新たなシンボル」（私立R大学）、「『共創の場』としての図書館」（国立M大学）、「智の蔵・智を蓄える、智をつかう、智をつなげる」（私立K大学）、「自らを一步高める情報館」（国立T大学）等など、圧倒的に「知」、「智」、

「情報」、「創造」という言葉が乱舞してはいるものの、そこには、「知」や「智」や「情報」を担い司る全人的存在としての「人間」そのものが欠落しているのではとの印象を拭えない。「知」も「智」も「情報」も、人間存在があつてこそ活かされるものであつて、人間から切り離された「知」、「智」、「情報」とは何であろうか? 「知」や「情報」の背後にはそれを担う「人間」存在のあることが欠落し、「知」が独り歩きしはじめた時、肝心の一人ひとり掛け替えない人間存在自体が忘れ去れてしまふのではないか? 換言すれば、人間を、「知」や「情報」やそれ以外のものにバラバラに切り分ける発想がそこには潜んでいる。

いまひとつ気づかされるのは、どのモットーも静的、スタティックな「知」や「情報」の集積の場としての図書館、「知」や「情報」を整理・管理する機能でしか図書館を捉えていない。ライネルス師自身がそうであつたように、変化することを厭わず、自由闊達にして、高潔なる存在たることを求める思いが、“*Seid edel, treu und gut*” (高潔忠実にして善良なるべし)や“*Hominis Dignitati* (人間の尊厳のために)”というモットーの内に込められているとすれば、図書館は、動的、積極的に、人や社会が変化・変容をきたし、それによつてダイナミックなイノベーションを生起させることを目指すべきではないのか? もはや、単なる「知識」や「情報」を整理・管理していればそれで良いとするスタティックな機能に留まらず、大胆に人や社会が、そして世界がかわることを目指す動的でダイナミックな機能を備えた特別な空間となることが図書館には求められている。

人と人とが全人的かつ異質な存在として「であい」、「つながり」、そして自分自身が「かわる」ことで、社会に真のイノベーションをもたらす。そうしてこそ、はじめて「個」の力は「世界」の力たりうる。これからの図書館は、そして、本学の図書館は、人がそこに来て、自らを互いに発見し合い、新たにつながり合うことで、「地の塩」、「世の光」へと変化・変容をきたす空間であり、ともに「かわり」つつ、全く新しいイノベーションがそこから生

まれることを真にサポートする図書館となるべきである。大学内の各学部、各研究科、各研究所、各センター、各部署がそれぞれの専門性や独自機能をそれぞれの場で深めつつ、しかもその上で、図書館で「であり」、「つながり」、「火花を散らしながら新たなコラボを経験すること、革新的イノベーションを世に生み出すべく互いに「かわる」ことをよしとする。そのような化学変化を生起させる触媒のような作用を図書館は担うべきである。一部署では不可能だったことが、図書館で複数の部署が「であり」、新たに「つながる」ことで、できなかったことができるように「かわる」、そのような限界突破を飛躍的に可能にする酵素のような働きを、本学図書館は果たすべきである。単に、大学キャンパスの中央に位置するからというのみならず、単に各単位校図書館の総代の役割だからというに留まらず、そのような触媒反応や酵素作用をもたらす中心的存在としてこそ、本学図書館は中央図書館の名に相応しく、学園創立者ライネルス師の思い描いた学園の姿を体現する図書館として生まれ変わるべきである。

以上